

長年にわたる地道な訳業ここに結実

合山 究

述書賦という、多くの人は曹植の「洛神の賦」や陸機の「文の賦」といった短い賦を思い浮かべるかもしれない。ところが、これはそのような短篇の作品ではない。上は周の史籀、秦の李斯から下は唐の肅宗の乾元の始めに至るまでの二百十人もの書人の書を賦形式で批評した堂々たる一冊の書論書である。分量だけ見ても、本文の賦の部分だけで七千六百

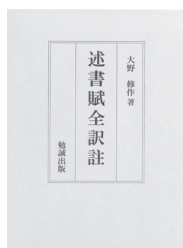
四十字（寶蒙の「語例字格」による）もあり、これは唐代の書論として名高い孫過庭の「書譜」の二倍の多さである。それに書人ごとに付された注や、批評用語を解説した「語例字格」なども加わるから、とても「文の賦」などの比ではない。

著者の寶泉は、字を靈長といい、扶風の人。唐の天宝年間に、官は檢校戸部員外郎、宋汴節度參謀に至ったという。『述

書賦』が完成したのは、兄の寶蒙の後序によれば、安祿山の乱後の大暦四年（七六九）である。書論では、これより前に孫過庭の「書譜」が六八九年、張懷瓘の「書断」が七二七年に完成しており、詩論では、皎然「詩式」が十七、八年ほど遅れて成っている。

簡単にその内容を紹介すると、本書の大半を占めるのは、すでに述べたように、古代から唐代に至るまでの書人二百十人の書を賦の形式で批評した文章と、書人の経歴や実見した書蹟などについて説明した注である。それらで先ず驚かされるのは「翰墨の妙にして品流に入るべき者は、咸な備さ（みづか）に収めた」という収録人数の多さであるが、それに加えて驚かされるのは、この本の中で取り上げた書人の書蹟は、彼がすべて目睹した（「親矚」「親

大野修作著
述書賦全訳註



A5判 488頁
勉誠出版 [1335円]

略」直筆に基づき、先人の既存の評語を借りてお茶を濁したようなものではなく、寶泉が述べていることである。これらの点からしても、本書が書法史の文献としていかに貴重なものであるかがわかるであろう。

『述書賦』の批評の仕方の特徴を、二挙げると、まず今述べたように、寶泉があくまでも通説に妥協せず、自己の鑑識眼や審美観に従って批評していることである。それゆえ、本書には賞賛ばかりではなく、「この人物はこのように思われているが、書には別の面があらわれている」といった、自分の見方による断言がしばしば見られる。たとえば、『書譜』の作者である孫過庭の草書を「千紙一類、

一字万同」のつまらないものだ」と酷評し、まるで孫過庭に対して何か特別な恨みでももっていたのかと思わせるほどにばつさりと切り捨てているのもその一例である。

ただ、だからといって、寶泉は自分の好みに固執するような偏狭な見識の持ち主ではなかったようだ。本書が練り上げられた美文の賦で書かれているので、何となく守旧派的な形式主義者の感じを抱かせるかもしれないが、彼が決してそうではないことは、当時の新興書法の書家である賀知章や張旭の狂草に随分注目し、彼らの経歴について長い注記をしているのを見てもわかるであろう。本書は特定の書家や流派に偏することのない広い批評眼をもつ稀代の批評家によって著された総合的な書論なのである。

次の特色としては、書名に「賦」と題していることからわかるように、この本のもつ文学性を挙げねばならないだろう。本書は、それぞれの書や人物の特徴を、さまざまな比喩、とりわけ自然物の比喩を多く用いてみごとに伝えている。

たとえば、陳の毛喜について、次のように評する。

快哉伯武、心空手敏。古風若遺、令範惟允。如平郊逸驥、晚景飛隼。

快なるかな伯武、心は空にして手は敏なり。古風は遺るが若きも、令範は惟れ允なり。平郊の逸驥（ひとりと離れた名馬）、晩景の飛隼（飛ぶハヤブサ）のごとし。

これは最も短い批評の一つであるが、このような詩的な表現手法によって、書のイメージを彷彿として浮かび上がらせているのである。

さて、これら二百十人の書人の批評の後に続くのは、表装、収蔵、購売、印章などに携わった六十六人に關する具体的な記述や批評である。上述の本文中にも、唐の貞観年間の人、李懷琳が他人の偽作をさかんに作っていたといった、書をめぐる社会背景について述べたものもあるが、この部分はずばら当時の書の背景について述べた貴重な記録であり、当時の書と商売の關係など多くの興味深い事実を今日に伝えている。

さらにその後、寶泉の「後序」など何篇かの文章が続いた後、最後に兄の寶蒙の作成した「語例字格」の附録を以て終結する。「語例字格」というのは、読解の便に供するために、『述書賦』中に含まれる重要な批評語彙を抽出して説明したもので、全部で九十言、各二句から成る注をあわせると百八十句が挙がっている。それには、「忘情」「天然」「放」「逸」のような普通の語から「束」「魯」「雄」「雌」「訛」「怯」といったおもしろい評語まであり、実にバラエティに富んでいる。宋代以後に尊ばれる「拙」「老」などの語がかなりのウエートを占めていて何度も用いられていることも驚きである。また、それぞれの語彙に付された注もおもしろい。たとえば、「枯槁」には、「北せんと欲して南に還れば氣脈斷絶す」と注し、「浮」には「帰する所なきを浮と曰う」と注し、「実」には「氣、風雲に感ずるを実と曰う」と注し、「閑」には「孤雲遠くに生ずるを閑と曰う」と注するようになり、なかなか文学的である。書をそんな風に觀賞するとさぞおもしろいだろう。

うなと思ひながら、それぞれの注句を味わうのも楽しいことである。

さてこのように、『述書賦』は中国書法史の研究にとって必須の基本的文献であるが、わが国ではこれまで全訳書をもたなかった。全訳書があらわれなかった理由としては、やはり翻訳の難しさを挙げねばならないだろう。すでに述べたように、典故を駆使し、彫琢を施した韻文体の賦形式によって書かれている『述書賦』は、それだけでも解説には相当の困難を伴うが、それに加えてさらに寶泉の造語になる独特の評語に対する書史学的理解や、長い歴史や多くの書人に対する幅広い知識などを必要とするからである。大野氏のような中国書法史の研究者であるとともに、中国文学の研究者でもある博学多識の学者でなければよう為しえないことなのである。大野氏はこの難事業に約二十五年前から取り組み、鹿児島大学の紀要に連載したが、途中、中断ののち再開し、このたびようやく本書の訳注を完成された。本書は大野氏という最適の訳者を得て、千二百数十年を経て

始めて全巻翻訳されたのである。

ただ、本書は上述のようにかなり難解で、分量も多いので、訳注のやり方については多少問題がないわけではない。とりわけ難しいのは、本書の記述内容が人物を批評しているのか、作品（書）を批評しているのか、把握しがたいものが多いいということである。大野氏はどちらでも解されるものの多くをかなり大胆に、人物ではなく、書や書風に関連づけて解説し、そちらに重きをおいた訳注を試みているようである。読者のなかには多少勇み足をおかしていると思う向きもあるかもしれないが、私はどっちつかずの曖昧な訳注をするよりも、このような試みのほうを多としたい。このほうが書法史研究に役立ち、刺激を与えらると思うからである。おそらく大野氏のこの挑戦的な訳注は、今後、中国書法史の研究者のみならず、他分野の研究者にも計り知れない便益を与えることだろう。

実は私は本書の書評を依頼されたとき、専門でもないのにやたらと違う分野に分け入って書評をするのはおがまし

いと思ひ、お引き受けてよいものかどうか迷った。しかし、本書を読み終えた今、大きな喜びを感じている。それは、知識的な面で勉強になったというだけではない。著者の寶泉とその兄の寶蒙がいかに精魂を込めてこの学術上極めて価値のある本書を著したが、ひしひしと伝わってきたからである。そしてまた、職業上多大な困難の伴う本書を、大野氏がいかに精魂を込めて訳注したかがわかったからである。全てが実利主義に流れる今の世にあつて、このような多くして報われることの少ない地味な仕事に身を擲つことこそ、学者としてこのうえもなく貴いことであると思わせるものが本訳注にはある。このような困難な訳業を完遂された大野氏の長年の努力に対して、心から敬意を表する。

（こうやまきわむ 九州大学名誉教授）

＊